

おねっちゃん

なりひらいちへいた
成平一平太

牧田キヨの人生は戦争によつて狂わされた人生だった。

真珠湾奇襲作戦の成功に沸いた開戦から数年が過ぎ、ラジオから流れる華々しい日本軍の活躍とは裏腹に戦果が厳しくなつてきているのは小田原で開業医をしていた牧田雅臣にも感じられる現実が目の前にあつた。

「キヨ、俊太郎ここに座つて。お父様のお話を聞いて。勝代さんもここに」

母のカヨと呼ばれて居間の中央に置かれた大きな座卓の前にそれぞれが腰を下ろした。

雅臣とそれを支えるカヨ。雅臣の手助けに忙しいカヨに変わつて、女中の大下勝代が住み込みでキヨと三つ下の弟、俊太郎の日々の世話をしていた。

勝代が牧田家の女中として住み込むようになって八年になる。俊太郎が産声を上げてまもなくだった。学校医を雅臣が引き受けている校長の紹介で隣

村の農家の娘だった勝代が風呂敷包みひとつを持ってやつてきた。大下勝代は十九の誕生日を過ぎたばかりだった。兄弟の多い農家に生まれ、尋常小学校を卒業すると同時に静岡の海産物屋に住み込み女中として奉公に上がり家事全般を仕込まれた。だが、その商家が破産の憂き目にあい、やむなく勝代が実家に戻つて間もなく牧田家への女中勤めの話もたらされたのだつた。家事がこなせ、子供好きの勝代ならと校長が直々に勝代の家を訪れての朗報だつた。その三日後には、上物とはいえないものの真新しいからし色の緋の着物におそろいのもんぺ、素足に赤い花柄の鼻緒の下駄を履いて牧田家の玄関に立った。特に化粧をしているわけではなかったが、目鼻立ちの整つた色白の顔に人のよさそうな笑みを浮かべていた。開け放たれている玄関の外では夏の暑い盛り、蟬の鳴き声が世情の騒がしさをかき消すかのようにただひたすら小さな体を震わせ想いをまき散らしていた。

真つ先に勝代を出迎えたのがキヨだつた。

「おねっちゃんだーれ？」

玄関先から投げられた訪問者の声に敏感に反応したキヨが素っ裸のまま駆け出し、愛くるしい笑顔

を勝代に向けた。キヨの尻がおむつかぶれで真っ赤になつていた。

「キヨだめよ、まだおむつ履けてないでしょ。お客様に失礼よ。それにおねっちゃんじゃなくておねえさん」

カヨの語尾にはキヨを諭すような母性にあふれた優しい力が入っている。

「奥様でしょうか？ 今日からお世話になる大下勝代です」

幼子を追いかけるように姿を見せたカヨに緊張した面持ちで深々と頭を下げる。一度顔を上げたかと思ふと、「よろしくお願ひします」と勝代がもう一度、頭を膝に付けんばかりに下げた。

「おねっちゃん」

キヨは裸足で土間に下りると勝代の顔を座り込むかのようにして大きな目をさらに大きくして覗き込んだ。

「お嬢様はいくつですか？」

「私の名前はキヨ。お嬢様じゃないよ」

膝を落とした勝代の顔に手を伸ばしながらキヨが愛くるしく微笑んだ。

「奥様、私がキヨ様のおむつを」

勝代が口にすると同時にキヨを抱くと榎に足を宙にうかすかのように座らせ、着物の袂から手ぬぐいを取り出した。

「キヨ様、まずは足を拭きましょう。そしておむつをつけましょうね」

カヨは、座卓を囲むように座った三人の顔をながめながら、勝代が牧田家の家族の一員となったときのことを思い浮かべていた。カヨの顔つきは笑みもなく、覚悟を決めたかのように落ち着き払っていた。

日本の将来を掛けた戦争は毎日のようにラジオから流れる勝利の戦果とは裏腹に、多くの男たちが戦場に狩り出されていた。そして狩り出される男たちの年齢も少しずつ上がっていった。召集令状がきた家の前では無事を願うかのような万歳三唱の声が上がリ、残された女子供にさえ竹やりを持つての最後の戦いに備えた訓練が連日繰り返されていた。カヨも勝代も例外ではなかった。

「みんな揃ったか」

白衣姿の雅臣が部屋に入ってくると、誰も背筋が伸びた。

「実は、三日後には私も陸軍の軍医として戦地に赴くこととなった」

開業医が軍医として召集されることは特に珍しいことでもなかった。しかしそこは階級のみが物をいう軍隊。召集を待っての軍医と志願しての軍医では扱いも大きく違えば、赴く先の戦火の激しさも違うことは誰もが知っていた。雅臣にしてみればこのまま静かに開業医を続けていたかったのだが、負け戦濃厚との噂が開業医中間の間にささやかれ始め、召集を待っていたのでは軍医とはいえ一般兵と同じ扱いのまま最前線に送られることになる。すでに勝敗が決まりかけている戦争などで死ぬわけにはいかない。生き残る確率の高い志願軍医として戦地に赴くために医院を一時閉鎖すると雅臣が告げた。

「勝代は引き続き、向こう一年はこのままカヨを手伝ってくればありがたい。しかし、先の見えない今日でもあり、他に行く場所があるのならばそうしてもらってかまわない」

「旦那様、私も奥様やお子様たちとお帰りになるのを待たせていただきます」

勝代は間を置くことなくこのまま牧田家に居たいと口にした。

「ありがとう。俊太郎おまえは牧田家で唯一の男の子だ、父に代わって皆をたのむぞ」

その晩は、わずかばかりの配給と闇で手に入れた餅米を使つての赤飯で雅臣の出征が祝われた。もつとも祝いの言葉には空虚感が漂い、ただただ無事で帰って欲しいと誰もが願っていた。

その一か月後には、東京に大量の焼夷弾がB29によつてばらまかれた。その結果、何万人もの犠牲者が出たとラジオが告げた。

「アメリカの爆撃機が日本の上空を我が物顔で飛んでくる。どうなっているのよ」

「やめなさい、勝代。誰かに聞かれたら大変なことになるわよ」

連日のように鳴り響く空襲警報に誰もが日本の負けを感じながらも口に出すことはできない。睨みを利かす憲兵に目をつけられないよう首をすくめていることで家庭の平和を保っていた。警報が鳴るたびに牧田家の裏山に掘られた防空壕に駆け込んだ。

健康な男はだれかれとなく戦地へと召集された。

開業医とて同じである。同じように看護技術のある女子も狩り集められた。空襲がつづく中であつて怪我人が増大するなか、素人によつての応急処置しかなすすべはない。怪我人は比較的安全と思われる寺や神社に集められた。

雅臣の手伝いを長年務めたカヨはその手伝いに狩り出されることもしばしばだった。

「キヨ、あなたは来年の春には高等女学校にあがります。母が数日留守をしても俊太郎とともに牧田の家を守らなければなりません。いいですね」

カヨの最後の言葉だった。隣村の妙興寺境内には多くのテントが張られていた。B29の飛来により幾多の犠牲者が生まれ、境内は野戦病院にも似た様相だった。カヨは看護助手として狩り出さ、その三日後には爆撃により妙興寺が焼失した。逃げ惑う患者や医療関係者がその犠牲となった。

カヨが出かけて十日ほどが過ぎ、カヨのわずかな遺品がキヨのもとに届けられた。さらに十日ほどが過ぎて父の戦死公報が届いた。

「キヨお姉ちゃん、お父様の白衣とお母様の割烹着お洗濯しなきゃだめかな」

尋常小学校の三年生になった俊太郎にキヨはまだ両親の死を知らせていなかった。キヨ自身がまだその現実を受け入れがたい精神状態だったからだ。共に間違いであって欲しい。限りなくゼロに近い確率であっても誤報であることを願わずにはいらなかった。

「俊太郎。お父様が言っていらしたでしょ。あなたは牧田家の長男なのよ。いつまでも白衣や割烹着と一緒に寝ないの」

キヨも俊太郎と同じように毎晩、両親の面影を求めるとく白衣と割烹着を抱き、頭から布団をかぶり、嗚咽をかみ殺していた。

「俊太郎さん、二つともお洗濯しましょうね。旦那様や奥様も真っ白な白衣や割烹着がお好きだと思いますよ。乾いたら俊太郎様のお部屋に掛けて毎日ご挨拶をしましょう。おはようございます。行つてきます。ただいま帰りました。おやすみなさい。つてね」

勝代は二人がすでにこの世には居ないことを感じ取っていた。戦争とはいえ、両親の死を受け入れなければならぬ残酷さに心が痛んだ。キヨの心が落ち着くまではと知らないふりを決め込むことにしていた。

なぜかここ数日、空襲警報が鳴らなくなった。

広島と長崎に大きな爆弾が落とされたらしい。街と人が溶けて消えたらしい。人々がささやき合っている。そしてその一週間後に戦争は終わった。あと一か月早く戦争が終わってれば雅臣もカヨも死

ぬことはなかった。キヨは戦争が終わったことによる安堵感とともに両親が戦争の犠牲となった怒りにも似た感情がこみ上げていた。

「勝代さん、俊太郎。ここに座って」

仏間にキヨが二人を呼んだ。改まって口にするキヨの顔が大人びている。開け放たれた仏壇にはロウソクの灯りと線香の煙が揺らいでいた。仏壇の中央に置かれた過去帳が開かれ両親の戒名がそれぞれ記されてあった。

「なんかお父様みたい」

俊太郎が何ごとかと神妙な面持ちで正座した。

「俊太郎、勝代さん。お父様とお母様が戦争の犠牲となつて亡くなりました」

キヨは静かに切り出した。それは、誰が聞いても十二歳とは思えない口調だった。子供にしてすでに牧田家の女おんなあるじ主ぬしと言つても過言ではなかった。そして、さらに続けた。

「お父様とお母様が亡くなつたいま、勝代さんには暇いそぎをだすしかありません。これまでお世話になりありがとうございました」

キヨは一息入れるかのように畳に手を付け深々と頭を下げた。

「嘘でしょ。どうして」

必死にこらえてはいても九歳。俊太郎の目から涙があふれ出した。とめどなく流れる涙を押し戻すかのように両手で顔を隠しながらも泣き声だけは出すまいと耐えた。これから幼くはあつても姉弟だけで生きてゆかなければならない覚悟を内に秘めたキヨの心情を俊太郎なりに察してのことなのかもしれない。

「これといった葬儀はできませんが、過去帳に戒名を書いていただいたお寺様に明後日ここに来てもらつてお勤めをします」

もう一度、間を置くかのようにキヨが仏壇の引き出しから封筒を取り出し勝代に差し出した。

「勝代さん、母から聞いていたお給金が入っています。長いあいだありがとうございます」

キヨはもう一度、深々と頭を下げた。俊太郎の肩は相変わらずケイレンを起こしたかのように時折上下に揺れていた。

「ありがとうございます」

勝代は頭を下げながら礼を述べて封筒を懐に入ると今後における身の置き方を尋ねた。

「キヨ様、これからどうなさいます？」

「俊太郎には将来お父様のように医者になれるよう頑張ってもらいます。私は、このまま高等女学校に進もうと思っています。卒業すれば働くこともできるでしょう。俊太郎の支えになろうと思います」

「そうですか。でも、こういつてはなんです。キヨ様も俊太郎様もまだ子供。お二人でこの家で学校に通いながら生活をしてゆくには無理があります」

「心配はいりません。母方の伯母に後見人になってもらうつもりです。生活費については両親が残してくれたものがあります。いざとなればこの家を処分してでも俊太郎を医者にしたいと思えます」

キヨは伯母のことなどあてにはしていなかったが勝代の手前そう言わざるを得なかった。

「キヨ様、こうしましょう。このまま私もこの家に住まわせてください。いいえ、給金なんかありません。私もどこかに働き口を見つめます。女中ということではなく同居人ということ」

勝代は、家賃は払えないがこれまで通り家事を手伝うと申し出た。さらに食い扶持も入れると。

キヨは勝代の申し出がありがたかった。子供だけの生活にはやはり大きな不安があった。大人の勝代と一緒に住んでくれるだけでも不安が払拭される

思いがした。そしてそれをもっとも喜んだのが俊太郎だった。

「本当、これからも勝代さんが・・・」

いつしか俊太郎の肩の揺れが収まっていた。

貧しい農家に生まれた勝代には帰る家などはなかった。四人の兄はいずれも召集令状が来て戦地に赴き次兄以外は戦死したとの連絡が届いていた。姉二人は農家に嫁いだもの戦争未亡人となり舅と子供を抱え苦労しているとの便りがあった。いつかは帰ってくるであろう次兄と末の弟が農業を継ぐことになる。しかし、年若い両親と二人の家族を養えるほど広い耕作地はない。幸いにして、田舎であることで戦火をまぬがれたとはいえ、弟が外に職を求めて出ていかなければならないのは目に見えていた。自分の住まいと食い扶持は自分で賄うしかない。戦争が終わり、誰もが戦場に赴いた男たちの帰りを待ちわびた。想いを断ち切らなければならぬ悲しく厳しい現実を突きつけられる母や妻や子。無事に復員してきたと笑みを浮かべながらも流れる涙を拭うことなく抱き寄せる家族。必ず帰って来ると信じて祈り続ける家族。住む家もなく食べることさえ難儀を強いられる混乱した日々がどれくらい続

くのだろるか。一日も早く落ち着いた暮らしがしたいと誰もが願った。キヨの想いも同じだった。裏山の防空壕に貯えられていた食料にも限りがある。雅臣が戦地に赴く前に母屋の庭は隅々まで畑に変えられていた。二本の柿木と一本の梅の木、終戦間際に手に入れた三羽の雌鶏と一羽の雄鶏。わずかな配給がキヨたち三人の命をつなぐ糧となる。幸いにして裏山がもたらしてくれる季節ごとの実りも助けとなった。

牧田家における三人は傍目またまめからは姉弟のようにも映っていた。両親が残してくれた遺産は目に見えて減って行く。カヨの着物や装飾品。掛け軸や壺を始めとした骨董品や絵画。箆笥の中はもとより押し入れや物置の中はすでに金銭に変えられるものは無いに等しかった。この六年あまりで大方のものは金に換えキヨと俊太郎の生活費と学費と化した。

それでも次第に世の中が落ち着き、焼野原は都市計画のもとに次々と整備され、新たな街が形成されていった。

「俊太郎と勝代さん。私は来月には高校を卒業します。そして働くことにします」

「えっ、大学には行かないんですか？」

勝代が驚きの表情を見せながら口にした。

「はい。俊太郎を父のように医者にするためにはそれなりのお金が掛かります。両親が残してくれたものはあらかたお金に換えました。もうこの家しか残ってはいません。医大を卒業するまでにはそれなりのお金が必要です。最後にはこの家も処分するつもりです。多くの人たちが新たな制度での義務教育のもと新生中学を出て働いています。私は高校まで通わしてもらいました」

キヨも十八歳になった。牧田家の主としてこれまでもやってきた。俊太郎が医者として独り立ちさせるために、必要なこれからの十五年はそのことだけに生きたいと力強く口にした。

「私もお手伝いさせていただきます」

「いいえ、勝代さんにはこれまで言葉では言い表せないほどお世話になりました。改めてお礼をいいます」

キヨは深々と頭をさげながら、「ありがとうございます。ありがとうございました」と口にして話をつづけた。

「この家は俊太郎が医大に進む時には処分することになります。勝代さんには勝代さんの人生を歩いて欲しいと思います」

かつよが十八歳で牧田家に来て十五年の月日が流れた。キヨの今の年齢と俊太郎が医者になるために必要な年月を考えるとキヨもまた三十三歳になつて初めて女としての自分の人生を考へることができることとなる。良き伴侶と巡り合い結婚をして子供を産み、母として生きることを望むには少し遅い年齢ではあるかもしれない。それでも勝代にそうあつて欲しいとの想いが強かつた。

「いいえ、キヨさん。この家を処分しなければならぬその日までこれまで通りこの家に住まわしてもらいます。お家賃もいくらかは払います。もっともいい男が現れれば結婚するかもしれないませんが」

勝代はキヨの気持ちに痛いほどによくわかっていた。それだけに放つてはおけなかつた。二人への情なのかもしれない。いずれはこの家を出ることはないなるかもしれないがもう少しの強い思いがあつたのだつた。

勝代の申し出のまま三人の暮らしを続けることになつた。勝代がキヨに渡す毎月の封筒の中身がなぜか少し増えた。キヨは、勝代なりに気遣いをしてくれているのだとあえて何かを言うのではなく、黙つて受け取ることにした。

キヨの一寸な俊太郎への力入れもあつて無事に国大の医学部に合格をすることができたその晩。

「キヨさん、これを使つて」

勝代は白い封筒をキヨに差し出した。封筒の下には静岡銀行と書かれ、中には百万円が入つていた。俊太郎が医学部に合格したことはキヨにとつては医者になるための一歩を踏み出したことにつながりとても喜ばしいことではあつた。と同時に、入学における準備費用もさることながら学費の工面においてもキヨの稼ぎではどうすることもできないことはわかつていた。すでにこの家を手放すべく不動産屋への依頼は済ませてあつた。

「勝代さんありがとうございます。でもこのお金はいただけません」

キヨは丁重に封筒に入った金を差し戻した。

俊太郎は東京に下宿先を探すことになる。百万円もの大金があれば入学金はおろか当面の学費の心配もいらぬ。少なくとも、想い出の詰まつたこの家を手放すことが先延ばしにできる。だからといって牧田家の使用人だつた勝代に甘えることはできない。毎月の給料が一万円にも満たないキヨには百万円という金額はとてつもない大金であつた。そん

な大金をどうして勝代が用意することができたのかもキヨには不思議だった。

「勝代さん、本当に長い間ありがとうございました。父も母も戦争の犠牲となりましたが幸いにもこの家は戦火を免れ俊太郎が医者として歩みだすのに役立ってくれます。俊太郎は東京に下宿先を、私はアパートを見つめます。勝代さんは勝代さんで新しい生活を・・・」

それから一週間で過ぎて不動産屋から買い手が見つかったとの連絡がきた。手付として五十万円を受け取りキヨは契約書に押印をした。残りの二百万円は明け渡し後とのことで不動産屋は帰っていった。早々にキヨは入学金を振り込み、俊太郎のあたらしい生活を始めるための資金に充てた。

四月になり桜が満開を迎え、三人がそれぞれの住まいにもなれ新しい生活が始まったかに見えた。が、キヨには浮かない日々が続いた。想いの詰まった家を手放したにも関わらず残りの二百万円が一向に払われる気配がなかった。再三にわたり不動産屋をキヨが訪ねることとなったが、その都度のらりくらりとかわされ、ついには店のカーテンが閉まったままとなった。思い余って新しい住人を訪ねてもみた

がすでに家の代金は全額不動産屋に支払われたことは契約書を見れば疑う余地はなかった。その翌日も翌々日も不動産屋を訪ねた。

「よう、おねえちゃん」

手付としての五十万円を受け取ってから何度この不動産屋の戸口を開けただろうか。店の前には十人ほどの人が群れていた。夜逃げをしたとの噂を聞きつけてやってきたらしい。売掛金を踏み倒されたと嘆く工務店の社長。大家なのか五軒分の家賃を持ち逃げされたと嘆く老婆。一見してそれとわかるガラの悪そうな連中の兄貴分らしき男がキヨに声を掛けてきた。

「おねえちゃんはいくらやられた。一万か二万か？」

「そんな小さなお金じゃありません」

キヨは、やくざ者の一言で事態の厳しさを知らされた。同時に不動産屋に騙された怒りよりも自分自身に腹が立った。と、同時に俊太郎への申し訳なきから自分のふがいなさを責めた。

俊太郎の医大生としてのスタートは切れたもの。これから必要とする学費は家を処分した残りの代金二百万円を切崩しながら充てるつもりだった。キ

ヨの稼ぎでは全てをそれにつき込んでも足りるものではなかった。

「じゃあ、十万か、二十万か？」

「そんなことあなたに関係ないでしょ」

「おとおわ。あかん、若い女子おなごがそんな怖い顔して」

「警察に行ってくる」

「あかん、あかん。警察なんか当てにならない。どうや、おねえちゃんなら若いしべっぴんや。いくらでも稼ぐ方法はあるで」

キヨには男の言っている意味がその時には理解できなかった。しかし、結果としてキヨが選択したのは赤い線を超えることでしかなかった。キヨは自分の身を汚すことに抵抗がなかったわけではない。しかし、それしか思い浮かばなかった。

男の経験のないキヨにとつて踏み入れる遊郭という世界への恐怖もあった。世間から蔑まれる選択であり、雅臣やカヨが涙を流して悲しむであろうこともわかっていた。普通の女として幸せを追い求めることを放棄することになることも承知していた。それでも、俊太郎を医大生として勉学を続けさせたかった。俊太郎が医師として成すことはキヨがカヨに近づくことでもあった。

キヨが潜ったのれんには藍地に白でやま屋やと染め抜かれていた。格式の高さを表す格子上に組まれた大籬おかしが一見して女郎宿の雰囲気を放っていた。格式の低い宿は格子の向こうに遊女が客を待つ姿を覗くことができたが、やま屋は障子で閉ざされていた。のれんを潜らなければ遊女の顔を見ることはできない。構造になっていた。一見の客は遊ぶことはできない。店を選んだ客だけが遊女を相手にできた。

「キヨ。あんたはまたましや」
遊郭で女郎宿を営むやま屋の女将がキヨに因果を含めるかのように口にした。

男に媚を売る遊女にも色々な事情があった。借金を背負って売られた女。男に騙されて逃げ場を失った女。アメリカ兵を専門とする女。その多くは相手を選ぶ自由など与えられてはいない。金に縛られ、稼ぐためだけに自身の身を横たえる。媚の売り方は稼ぐ金額の多さに直結する。スタイルや美貌だけでは必ずしも多くの客を獲得することはできない。遊女の世界にも仁義もあれば掟もある。そんな中にある世界にはあるが縛りを全く受けないで身を投じた女もいる。キヨがそうだった。抜けようと思えばいつでも抜けることができる。指名してきた客が気

に入らなければ拒否することもできる。誰の縛りも受けない恵まれた環境にあった。もつともその待遇を受け続けるにはそれなりの強い意志も必要だった。人間としての、女としての尊厳を捨て、ただ金を得るためだけに躰を見知らぬ男の前に投げ出す。より多くの金を得るためにはより多くの男に媚をうらなければならない。そのためには話術も必要ならば演技も必要となる。キヨには美貌にそれらがプラスされていた。貢がなければならぬ男も、搾取される相手も借金もないキヨには、決まった金額を確実に得ることができる最善の手段が娼婦だった。

何もかもを承知の覚悟を決めての苦界への一歩ではあつたがさすがに躰が震えている。女を買いあさる脂ぎつた男であつても部屋に通せば客として接しなければならぬ。

襖を開けると、男は手酌で静かに酒を呑んでいた。初めての客は五十半ばを少し過ぎたくらいに見えた。身なりの良い紳士でもあつた。キヨにとつて幸運だった。

「いらつしやいませ。よろしくお願ひします」

キヨは部屋に入り静かに襖を閉めた。畳に手を着くと深々と頭を下げ、男の横へと体を移した。

「あんた、キヨゆうんやてな。女将が言つていた通り本当に初めてみたいやな」

男は、キヨをジロジロと見るでもなく静かに杯を口に運んだ。

少しばかりの酒の肴が置かれた膳から少し離れて枕屏風が置かれ、いかにもそれらしい赤い柄の布団と枕が覗き見える。キヨは何をどうすればよいのかもわからずただじつと男の横に座つていた。体の震えは一向に収まる気配はない。幸いなことに突き刺さるような男の視線もまとわりつくような視線も感じられない。

「今日は、静かに酒を呑むことにする。あんたはその相手をしてくれたらいい。明日また来る。皮きりはあしたや」

男のキヨへのやさしさだった。

翌日、男は再びやってきてキヨを指名してきた。いや、指名というよりは昨日から二日つづけての囲いだつた。その結果、キヨはまだこの時点では誰にも抱かれてはいない。

ことを終えた男は、うつ伏せの状態で布団から肩を出し、たばこに手を伸ばしながらキヨに唐突とも思える口調で話しかけた。戦後のどさくさの中を闇

市で儲けた金を元手にスパーマーケットを開店させ、今では相模地区に十店舗を持つほどに成功したと。そしてさらに話を続けた。

「どうや、あんたわしの妾になる気はないか？ この先どこの誰かもわからん男に躰を投げ出すのは辛いやろ。何があつたのか、どうして金がいるのかは知らんがわしがその面倒をみてやってもいい。あんたが必要な金を毎月の手当とするし、住まいもあてがって・・・」

キヨと二日続けて時を重ね、キヨが醸し出す育ちの良さと苦界に身を置くギャップ。それも借金に縛られるでもなく自分から身を投げ出してきたと女と女将から聞いた客。根ほり葉ほりと深く事情を聴いたわけでもない女将だったが、キヨに対しての同情と優しさから選んだ皮きりの客だった。

初めて男と床をともししたキヨ。不思議と何の感情も湧かなかつた。心が通じ合うわけではない。これから情を交わす相手として気に入つたか否かだけが前提でしかなかつた。娼婦として生きていくためには愛想笑いも必要である。

「キヨ、いいね。客を相手にするんだ。みじめつたらしい愛想笑いは興ざめだからね」

キヨは、始めてやま屋ののれんをくぐつた日に女将から言われたことを男の裸の背中にも顔を寄せながら思い起こしていた。

男を店の外まで女将とともに見送り、キヨはそのままアパートに帰つた。遠くで東海道本線の夜行列車を通るのか踏切の音が暗い部屋の中に遠慮なく押し入ってくる。キヨは押し入れから出した布団の塊にそのまま顔を押し付けた。制御することさえもできない涙。ただただ声が漏れないようにと奥歯に力を入れることで気を静めるしかなかつた。そんな毎日が一週間ほど続いた。

俊太郎を医大に通わせ続けることができ、キヨ自身の生活が成り立てば充分だった。必要以上に男に躰を任せることはしたくはない。そんなキヨには男の申し出はありがたかつた。それでも男の申し出を受け入れがたい理由があつた。男の世話になることは籠の鳥になるも同然だった。どこかに出かけるにも遠慮がちに許しを請うことになる。身を置く世界は汚れていてもキヨは常に自由でありたかつた。四季の草花や山水を求め歩くことで身を清めたかつた。そうすることで娼婦が放つ気色を消し去ることができると信じたかつた。

時が流れ、多くの常連客に恵まれても娼婦の身に慣れることはなかった。行為そのものは娼婦であっても見た目には育ちの良さと美しさだけが漂っていた。

キヨの表の顔と裏の顔を仕切るものがやま屋ののれんだった。キヨがやま屋の外で客と逢うことはなかった。掟に背く行為でもあった。まれに客と街で出会うこともあるがキヨは素知らぬ振りをする。相手も同様だった。たとえお互いに連れがいなくても同じことだった。やま屋の客の素性の良さがキヨにはありがたかった。

キヨは時折、俊太郎の下宿先を訪ね身の回りの世話をすることも自身を癒した。

「俊太郎、今月の生活費。学費の方はもう納めたからね」

「ありがとう、キヨねえちゃん」

俊太郎は、家売った金を少しずつ切崩しているものと信じていた。医大を受験するにあたって思いの詰まった家を処分するとキヨから聞かされていた。父である雅臣との記憶は僅かではあっても父の匂いとぬくもりを感じとることができる唯一の白衣。母、カヨの割烹着とともに今でも大切にし、

下宿先にも持ってきた。さすがに両親の匂いを求めて抱きしめることはなくなつたがいつかこの白衣を着て患者の前に立ちたいと勉強にいそしんでいた。

「キヨさん？ キヨさんじゃない」

東京駅のホームに立つキヨの背中に勝代が声を掛けた。キヨがこの世界に入つて二度目の夏のことだった。ホームの影に身を寄せて下り列車を待つキヨは声のする方へと振り返つた。

「勝代さん？」

白地に薄い水色の立縞模様の小千谷ちぢみにあざき色の帯。暮らしの良さが際立つ装いの婦人。それほどに濃い化粧ではないものの勝代であることに気付くのに間が必要だった。そのうえキヨは、一瞬ではあったが気後れしている自分がはじめにも思えた。

「久しぶりね。俊太郎さんの所からの帰り？」

「ええ」

「俊太郎さん、頑張ってる？」

「ええ」

「そう。よかったわね。キヨさんも苦勞の甲斐があるってものよね」

同じホームに立、電車を待つているというこのまま小田原まで時間を共有することになる。勝代の着物を見れば暮らしぶりの良さが漂う。今のキヨには勝代がまぶしく、娼婦をしていることなどみじんも覚られたくはない。何とかしてこの場を立ち去りたかったが、もうすぐそこに電車が見える。

「おねえさん、お待たせ。五号車はもう少し先よ」
一見して水商売風の派手な服装の若い娘が弁当とお茶を下げていた。

「ごめんね、キヨさん。また今度、ゆっくり。こちらから連絡するわね」

「じゃあ、また・・・」

キヨは勝代に連れがいたことがありがたかった。少なくとも小田原まで穏やかな時間を過ごすことができそうである。そして、小田原に着いたら再び勝代と顔を合わすことのないように改札を出ればいい。もつとも、「こちらから連絡するね」と、勝代が別れ際に口にしたことがキヨの胸の内をざわめきつかせた。勝代とキヨは何ら連絡を取り合っていない。住まいも知らないはずだった。連絡のとりのようなはずだった。

「キヨ、あんた勝代と知り合いなのかい？」

翌日、キヨがやま屋に顔を出すなり女将に呼ばれた。

「ええ、子供のころに・・・」

まさか知らないとは言えなかった。ざわついているキヨの心に女将は続けた。

「勝代もね、あんたと同じ。自分からこのやま屋にやってきて仕事をさせて欲しいって。器量のいい娘でね、上客がすぐに付いたよ。玉音放送のすぐあとだったね。ここで稼いで金を貯め、今じゃ小料理屋の女将におさまっている。都小路の勝翠」

キヨは女将から聞いて初めて知った。あの時の百万円は娼婦をすることで得たお金だったと。終戦のどさくさの中、学歴もなく手に職の無い勝代が間借り代と称して毎月決まった額をキヨに差し出していた。その額は賄い代を入れても充分な額でありキヨと俊太郎にとって毎日をつなぐ助けになっていた。「こんなに」とキヨも思わぬでもなかったが、勝代が何をして稼いでいるのかを詮索することなどできなかった。

「それで、勝代さんは何て？」

「いつでもいいから顔を見せてって。嬉しそうに言っていたわよ」

古くからいるやま屋の娼婦なら勝代のことを誰も
が知っていた。娼婦仲間から「お姉さん」と呼ばれ
慕われていたらしい。キヨはできることならば誰に
も娼婦であることは知られたくなかった。俊太郎は
もとより学友やこれまでの多くの知り合いには。も
ちろんそのなかに勝代も入っていた。

都小路の本通りから少し脇に入った所に勝翠はあ
った。一流とはいえないまでも一介の勤め人がのれ
んを潜れるような店でないことは玄関先の石灯籠
と水鉢をみればわかる。

「キヨさん？ 牧田キヨさんですよ？」

店の前に打ち水をするのか、手桶をもった仲居風
の女がキヨに気付き丁寧に頭を下げた。

「はい。女将さんはいらっしゃいますか？」

どうしてこの女は私の名前を知っているのかと戸
惑いもあつたがキヨは素直に言葉を返した。

「やっぱり。女将さんが言っていました通り、美人
さんだから直ぐにわかりました。どうぞ中へ」

キヨは丁寧に頭を下げてから女の後について店の
中へと入った。それほどには大きくない日本庭園で
はあるが丸く刈り込んだ木々の緑はやさしく微笑
み、水にぬれた庭石が夏の暑さを和らげ、鹿威しかゐしの

岩を打つ音が庭に響き、来店する客のプライドをく
すぐるかのような落ち着いた雰囲気を醸し出して
いた。格子戸を開け、上り框で履物を預けると、キ
ヨは座敷に通された。八畳ほどの和室には床の間が
施され花瓶には花が活けてある。トルコ桔梗の白い
花と吾亦紅がキヨに語りかけるかのような涼しげ
な笑顔を振りまく。

女は床の間を背中に座布団を置き、畳に手をつき
「いま、お茶をお持ちします」とキヨに告げ、扇風
機のスイッチに手を掛けると部屋を後にした。女将
の躰けが行き届いた所作。従業員から勝代が慕われ
ている様子が涼やかな風とともに手に取るように
伝わってくる。キヨは女が部屋を出ると部屋の入りに
口側に座布団を動かし座り位置を変えた。さすがに
上座では気が引けた。

ほどなくして氷の入った緑茶と和菓子が二つ、キ
ヨの前とその向かい側に置かれた。グラスの外側に
付いた細かな水滴から勝代の心遣いが伝わってく
る。汗ばむキヨの喉を誘惑したが手を伸ばすのは控
えた。

「ごめんなさい、お待たせしました」
女とすれ違ふかのように勝代が部屋に入ってきた。

淡い紫の小紋を着こなし、料亭の女将としての風貌の勝代。キヨは格の違いを認めないわけにはいかなかった。

「急な訪問でごめんなさい。東京駅では失礼いたしました。今日はお誘いいただいたのでお顔を見に」

キヨは丁寧に頭を下げ、風呂敷包みを解いて土産に持ってきた羊羹をさしだした。

「ごていねいに。キヨさんはあいかわらず固いのね。ね、キヨさん、ゆっくりできるわよね。久しぶりにお話もしたいし。今日はねハモの美味しそうなのが入ったの。ハモは京都では有名な夏が旬のお魚なのよ」

勝代は懐かしさからなのか笑顔が弾んでいる。反面キヨの心は猜疑心にも似た面持ちではあったが表に出すまいと微笑みを返した。

「やま屋は私も出入りしていたの。もう知っているわよね。戦争が終わって混乱した世の中で私が働くところなんかどこにもなかった。キヨさんや俊太郎さんと一緒に暮らしたいし、かといってお金の苦労も掛けられないし。割り切るしかなかった。きつと今のキヨさんと一緒ね。誰かに面倒は掛けたくなし、借りも作りたくない。何としても自分が……」

屋号の勝翠、勝は私の勝代の一字、翠は汚れの無い深い緑色。水辺に飛んでいる翡翠ひよこめの羽の色、綺麗でしょ。キヨさん見たことある？」

勝代は興奮気味にキヨに語りかけた。

「知っています、翡翠。刈川のほとりを飛んでいるのを見たことがあります」

勝代がやま屋ののれんを潜ったのはキヨと同じ心境だったと口にした。キヨが三歳の時に勝代は牧田家の使用人としてやってきた。キヨは勝代によって育てられたといっても過言ではない。勝代をおねちゃんと呼び、どこにゆくにもついてまわった。それほどに勝代になつき可愛がられた。キヨの成長とともに馬が合う年の離れた姉妹にも見えた。雅臣とカヨの死は戦争による悲劇ではあったかもしれない。しかしその悲劇は終焉ではなくキヨと俊太郎にとつて新たな苦難の道を強いる道標でもあった。二人に立ちほだかる苦難の手助けになればと勝代は娼婦の道を選んだ。家賃と賄い代として十分な金をキヨに渡し、いざという時のために貯える必要がある。俊太郎を医者にしなければという強い思いが勝代にもあった。俊太郎が医大に合格し、大きな金が必要となった。ここぞとばかりに勝代は貯えた百

万円の金をキヨに差し出した。しかしキヨは、この家を処分して金を用意したいと口にした。キヨの性格は手に取るように勝代にはわかっていた。それでもさすがにシヨックであった。躰を男にあずけることで得た金ではあっても、常に心は清らかさを失うことはなかった。勝代はキヨの想いを察するに余り、数日後には牧田家を出て独り暮らしを始めた。そして新たな目標を定め娼婦から小料理屋の女将への転身を図った。仲居の経験を積んでから勝翠ののれんを掲げた口にした。

勝翠はすべてが予約客でありその時間ごとに女将と仲居が玄関先で出迎える。キヨはのれんが玄関先に掛けられる前に腰を上げた。勝代と過ごした二時間あまりは忘れていた幼少期の懐かしさに心が解きほぐされる思いだった。今のキヨの生活には何ら触れることもなく、勝代に勧められるがままハモを肴にコップ二杯ほどのビールを呑んだ。初めて口にしたハモは梅肉とほどよく合い、アパートに着くまで口に残る思いがした。

俊太郎が医大に入学して六年目になる。卒業と同時に医師になるための国家試験が待ち受けている。

さらには研修医の実績も積まなければならない。晴れて俊太郎が医師として独り立ちするまでに二年強。キヨは俊太郎が医師としての道筋が立と同時に娼婦の世界からきつぱりと身を引くつもりだった。そのときにはキヨは三十歳となる。いくら心の清らかさは失わないように努力してきたとはいえ、過去を隠して嫁ぐことなどはできない。この先、独りで生きてゆくための何ができるかを考え始めていた。

俊太郎も同じだった。医学生としての六年間、勉学と実習に明け暮れてきた。金銭的な負担はすべてキヨに頼るしかなかった。小田原の家を処分した金のすべてがそれに費やされたに違いない。いや、それだけでは足りないのではと思わぬでもなかったが、実習に追われる俊太郎には金を稼ぎ出す時間も余裕もなくキヨに甘えるしかなかった。医大を卒業さえすれば薄給ではあっても研修医として生活を成り立たせることができる。少なくともキヨに金銭的な援助を強いることはない。俊太郎はこれまで以上に勉学と実習に身を投じ、首席で卒業することができた。

「牧田、よく頑張った。この先のことだが大学に残って研究を続けなにか」

俊太郎の医師国家試験合格を祝すかのように学部長が俊太郎に大病院に残るように勧めてきた。医学生にとってこれほどに名誉なことはない。しかし二年の初期研修後、再び医学生として大学院に籍を置き、博士号の肩書を目指すことになればさらに四年の月日を必要とする。

「俊太郎、何を迷うことがあるの。お父様のようなりっぱな医者になるのですよ。博士号を取って、研究を重ね、大病院の中のし上がってやろうくらいの気構えを持ちなさい。男でしょ」

俊太郎が迷う理由はもう一つあった。医大に通うために手放した家を何年かかってでもいつか買戻し、再び牧田の表札を掲げたいと。そのために父が書いた表札を大事にしまっていた。大学院生としての四年間、さらに医局での下積み生活が続くことになる。必ず名を馳せるとは限らない。教授どころか講師のまま終わることさえある。厳しい競争の世界であり何ら縁故を持たない俊太郎にとってけして明るい未来とは言えなかつた。

「姉さん、今まで口にしたことはなかつたけれど、早く金を稼げるようになっていつか、あの家を買戻し診療所を開きたいんだ」

キヨは驚いた。俊太郎が生まれ育ったあの家への思い入れの強さに。

「そう、あなたそんなことを考えていたの」

俊太郎が取り出した古い表札を懐かしそうに眺めながらキヨが涙ぐんだ。

「そうね、いつかあそこでもう一度・・・」

世の中が落ち着いて来ればだれもが土地を求めるようになり、あれだけの家を買戻すには手放した時の何倍もの金を必要とする。

「俊太郎、あの家を買戻すには大病院でのし上がって教授になり学部長ぐらいにならないとだめね。ただの医者じゃあそんな大金を手にするのは難しいわよ」

今のキヨには先行きが見通せなかつた。売春防止法が施行されて二年。やま屋ものれんを下ろし、闇の世界でこれまで通り娼婦として生きている。あと少し、あと少しと自分に言い聞かせながら男に身を預けているのだった。今この世界を仕切っているのはやくぎ者が縄張りと呼んで互いにしのぎを削っている。幸いにしてキヨはこれまでの常連客と直接連絡を取り合い、糧にすることで収入という面ではやま屋に上納することもなくなり俊太郎に不自由

を掛けることはなかった。しかし、キヨが年を重ねて行くのと同じに客の年齢も上がって行く。いつまでも同じ客筋と床をとにもすることはできないこととはあきらかだった。だからといって他に客を求めるときは危険が伴う。警察の目もあればやくざ者の餌食にされてしまうことにもつながりかねない。やま屋から解放された女の多くが更なる苦難の道に引きずり込まれていることはキヨの耳にも届いていた。

「俊太郎、医局に残れるよう頑張りなさい。家を売ったお金はもうないけれど・・・できるだけのこととするわよ」

「わかった。でもお金のことはもういいよ。姉さんは自分のことだけ考えて。国家試験に合格したんだ。薄給かもしれないけれど自分のことぐらいいはできる。院生になればアルバイトもできるし」

「そう、俊太郎も頼もしくなったわね」

キヨは俊太郎が独り立ちしていくのが嬉しかった。と、同時に寂しさがこみ上げてくる自分に気が付いていた。

アパートに帰ったキヨは、箆笥の上に置かれた雅臣とカヨの位牌にこのことを告げた。此の時キヨは

すでに三十歳を超えていた。これからのような職業に就き、生計をなしてゆくのか考えなければならぬ。職を見つけるにあたって誰かに頼るあてもない。少なくとも履歴書にやま屋と書くわけにはいかない。嘘の履歴を作り上げる必要もあった。保証人も要らず、身元調査を受けない職業となると多くはない。結果としてキヨはずるずるとこれまでの客に躰を預けるしかなかった。

「姉さんごめん。俺は何も知らずにぬくぬくとこれまで過ごしてきた。本当にごめん」

俊太郎が研修医を終え、医局に籍を置き講師の肩書がついた時だった。キヨが俊太郎のアパートを訪ねると、窓のカーテンを開けることなくブツブツと何度も同じことを繰り返しながら安物のスコッチをあおっていた。時折体が震え、涙声にさえなっている。

「俊太郎、何をやっているの？」

キヨは俊太郎の容易ならぬ状況に驚きを隠せなかった。

「俊太郎、何があったの？」

俊太郎が持つグラスを取り上げキヨはもう一度、叱責するかのように大きな声を上げた。スコッチの

瓶はすでに空に近い状態にある。これまで酒を呑むことなどほとんどなかつた俊太郎は酩酊していた。

「姉さん・・・ごめん、本当にごめん」

大きな声で我に返つた俊太郎は涙を隠すこともなく小さな子供が母親に甘えるようにキヨの躰にしがみついた。キヨの脳裏に大きな不安が湧きあがつた。尖つた槍が刃先の光をきらめきさせながらキヨの心臓を今にも突き刺さんとするかのような不安だった。

「姉さん、おれに縁談話が持ち上がったんだ。学部長の御嬢さんとの・・・。でも、それは壊れた。もう医局にもいられない。そんなことはどうでもいいんだ。養子などになるつもりなかつたし。そんなことよりおれは・・・」

キヨにしがみつくかのように廻していた腕を少し緩め俊太郎はゆつくりと話し始めた。キヨを襲つた不安は的中した。俊太郎が一言を発するたびに、この小さなアパートの部屋の空気が固体化されたかのようにキヨの躰に重くのしかかり、今にも押しつぶされそうになつていった。

「結婚話を進めるにあたつておれの身上調査をしつたらしい。おれのことには勿論、姉さんのこと・・・」

おれは知らなかつたんだ。てつきり家を処分したお金で医大に通う費用を賄つていたと・・・」

キヨは娼婦に身を落とすことを誰にも知られたいはなかつた。いや、誰に知られようが俊太郎だけには覺られまいと隠し通したつもりだった。

「そう、ごめんね俊太郎。お姉さんがバカだったの。家を売つたお金を不動産屋に持ち逃げされてしまつたの。だからといつてせつかくの医大を棒に振らすことなどできなかつた。でも後悔はしていないの。俊太郎がお父様と同じ医者になることが私の夢もあつた。そしてこうして医者としての道を歩み始めてくれた」

キヨは優しく俊太郎を抱きしめ返した。俊太郎は勉強ができたが必ずしも心の強い性格ではなかつた。勝代やキヨが可愛がつたせいなのかもしれない。とりわけ、雅臣

とカヨを同時に失つて寂しがらないようにと常に俊太郎によりそつた。俊太郎もまた常にキヨから離れようとはしなかつた。

キヨが娼婦に身を落とすことで俊太郎が医大に通い続けることができた。キヨの犠牲の上に成り立

つた俊太郎の医者としての道。俊太郎にとつて精神的な負担として大きく心にのしかかつていることは容易に想像できた。それが新たな不安として湧きあがろうとしている。俊太郎を抱き返すことでキヨはそれを払拭したかったのかもしれない。

医局員としての籍を退くことになり俊太郎は地方の大病院の医師として働くこととなった。キヨの抱く小さな不安が払拭されたわけではなかったが俊太郎の荷物をまとめトラックに積み、見送るしかなかった。

しばらくしてキヨのもとに俊太郎から手紙が届いた。手紙には、幼い時の思い出が幾つもつづられていた。そして最後に開業医をめざしてこの病院で多くの経験を積むことにする。姉さんもこちらに来て一緒に暮らさないとあった。

キヨの心は弾んだ。消そうとしても消えなかった小さな不安も解消されたかにもえた。小田原を離れ、俊太郎とともに新しい生活を始めることにした。キヨの新たな目標は、俊太郎に嫁を取り医院を開設することとなった。新たな土地で仕事も見つけることができた。医師の肩書を持つ俊太郎が保証人ともなればこれほどに確かなものはない。履歴書にはこの

八年間は無職（家事）とした。弟が医師になるくらいだからきつと資産家の娘なのだとも誰もが思った。職に就くこともなく家事に専念していてもなんら不思議ではないと勝手に解釈をしてくれたのだった。

しかし、平穏な暮らしはすぐに破たんした。俊太郎が務める病院には梅毒に侵された患者が寝たきりの状態で何人か入院していた。終戦後、多くの女性が身を落とし遊女となった。その誰もが苦難の選択だったに違いない。夫を戦争で亡くし、子供を抱えながら今日を生きなければならぬ。なんら力のない女に何ができたのだろう。糧を得るためには他の方法を見つけだす余裕などなかった。だれにも知られたくない選択ではあつても咎めることなどできない。それほどに混乱した時代だった。

客の質は、必ずしも良いわけではない。常に危険との隣り合わせの境遇を余儀なくされる。取り巻きの質もけして良いわけではない。特に赤線の廃止とともに闇に潜った世界となった。やくざ者が暗躍することですらに環境も客質も悪くなる。その結果、性病が蔓延することとなる。的確な治療さえすれば大事にならずに済む場合もあるものの、本人が気が付かないうちに脳を侵されてしまうことがあるのだ。

梅毒から逃げることはできても侵された脳がもとに戻るわけではない。意識は混濁し痴呆にさえなる。そんな患者を目の前に俊太郎の心が荒んだ。キヨと患者が重なる思いがしてならなかった。

襲いかかる妄想を振り払う手段として俊太郎は酒に走った。酩酊した状態で街をふらつくことも多くなった。消えたはずのキヨが抱いた小さな不安は形となって表れた。酩酊した状態の俊太郎が歩道から車道によろけ落ち、闇を切り裂くようなタイヤのきしむ音と、クラクション。即死だった。不安は交通事故による俊太郎の死とともになにもかもが完全消滅した。

キヨの生きがいも目標も俊太郎の死とともに消えた。キヨは、抜け殻となった躰を持って余すような生活続けるしかなかった。再びキヨは小田原に舞い戻り、かつての客に抱かれることで空洞と化した躰を埋めることを覚えた。

療養を専門とした病院に三百を超える老人が横たわっている。その多くは、自分がどこにいるのかさえ理解できない状態にある。静かに死を待っているだけの患者たちである。まれに若い患者もいるがそ

の多くは八十歳を超えた老人だ。ベッドの枕元に牧田キヨの名前がある。回診に訪れた看護師が開くカルテには八十六歳、梅毒、パーキンソンと書かれ、生活保護者と赤字で記載されている。

どこを見るでもないキヨの視線は病室の空間をさまよいながらも微笑みを浮かべているかのように見える。雅臣を見つけカヨを見つけ俊太郎にも逢えた安堵の笑顔のようにもみえる。そして時折、「おねちゃん」と嬉しそうに口にする。

了